

作業療法におけるセラピストの臨床推論について

コミュニケーション面に焦点を当てて

発達医療センター花北診療所
リハビリテーション部 作業療法士 森村 慎吾

【はじめに】

姫路市総合福祉通園センターの作業療法（以下、OT）は、1セッション40分間で実施している。今回、対人意識が弱い児に対してOTを実施する際の臨床推論について振り返った。その中で、コミュニケーションの基礎となる参照視や、関わり手の意図を確認するアイコンタクトを引き出すセラピィで、児の行動に変化が見られたので報告する。

＊臨床推論：臨床現場で遭遇する様々な事柄について、知識や経験に基づいて解釈や分析を行い、こどもの理解・解釈を試みる仮説思考の過程・作業

【児の様子】

自閉症と中等度知的能力障害の診断を受けた4歳の女兒。地域の児童発達支援事業所に通っている。コミュニケーション面は、要求時にアイコンタクトはあるが、要求以外ではアイコンタクトは見られない。クレーンが中心で有意語なし。要求に応じてもらえない時は、情緒的に大声を発することや耳ふさぎ行動がある。好きなあそびはYouTubeやDVD鑑賞、公園の遊具で高い所に登ることであった。母親は主訴として“危険に気づかない”“声をかけても振り返らない”“店内を走り回り、商品を棚から落とすので買い物が大変”を挙げられた。

【OT 評価1】

（感覚統合療法室に入るまでの様子。セラピストの関わりに意図があることを児に伝えら

れていない場面）

セラピストは「おいでおいで」と声をかけ、手を差し出すが、児はセラピストの手を持たずにその場から動かなかった（図1）ため意図が伝わっていないと考えた。セラピストが背中を押しながら誘導すると移動に応じるが参照視はなく（図2）、移動する途中にセラピストが手を離すと児はその場で立ち止まるため、この場面も意図が伝わっていないと考えた。セラピストが部屋に入る様子を見ると児は追いかけるように動きはじめ（図3）、この時に児は入る部屋を理解したと考えた。



図1



図2



図 3



図 5

表 1：OT 評価 1 まとめ

セラピストの思考	
Aちゃんに、入る部屋を伝えるための関わりと評価	
・「おいでおいで」と声掛け ・手をつなごうとする	意図が伝わっていない
・直接身体に触りながら誘導	応じるが、意図が伝わっていない
・セラピストが部屋に入る	部屋を理解した
関わりに意図があることを伝えられなかった	



図 6

【OT 評価 2】

(絵や実物の提示、直接的な関わりを通して、児の理解力や行動の特徴、対人反応を確認している場面)

セラピストがスリッパの絵をタッピングすると脱ぐこと (図 4)、消毒液の容器を目の前にだされると手を出すこと (図 5)、トランポリンを見るとジャンプすること (図 6)、靴下を脱ぐ手伝いをすると自分で脱ぐことから (図 7)、生活で経験している動作は、状況と物や絵を見て理解し、動き出す力があると考えた。一方で対人面は、どの場面も周りの人の顔を見ることはなかった。



図 4



図 7

表 2：OT 評価 2 まとめ

セラピストの思考	
気づきと行動の評価	
・スリッパの絵を見て脱ぐ ・消毒容器を見て手を出す ・トランポリンを見てジャンプ ・靴下を自分で脱ぐ	経験から、状況と、ものや絵を見て理解して動くことができる
対人面の評価	
・人の顔をみない	

一連の関わりで、児は身体に触れられた時の応答性が良いこと・具体物を見ると行動できることを確認し、児とコミュニケーションを取りながらセラピィを展開する上で関わりのポイントとした。

表 3：関わりのポイント

セラピストの思考	
この時、具体的に言語化はできていないがコミュニケーションを取るための方向性が出てきている	
身体に触れられた時の応答性	セラピィを展開する上で関わりのポイント
具体物を見ると行動できる	

【OT 評価3】

(要求の意図を汲み取り関わったが、意図を読み間違えていた場面)

三角のブロックを登ろうとするが(図8)、何度か失敗した後に児はセラピストの手を引いた。セラピストは「上にある穴に入りたがっている」と思って関わった(図9)。



図 8



図 9

ブロックの先端に立っている時に児が姿勢を崩しかけたためお尻あたりを支えると「あー、あ、い、あ」と大きな声を出した(図10)。セラピストは身体がぐらついたことが怖かったのだと考えた。

＊映像で目線や姿勢を見直すと、児は降りたいと思っている時に押されたために、大きな声を出していたのだと分かった。この場面は、セラピストは児の意図を読み間違っていたと映像で気づいた。

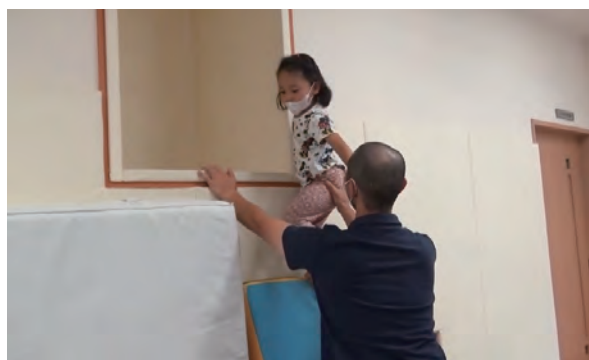


図 10

表 4：OT 評価3 まとめ

セラピストの思考
<u>セラピストの読み取り(登りの場面)</u> ・ 洞穴に入ることを目的に登っていると考えていた ・ Aちゃんの身体がぐらついたように見えたので支えた ・ 「あー！あ、い、あ」と発声した理由は、ぐらつきが怖かったから
<u>Aちゃんの反応(映像で見直した)</u> ・ 洞穴に入ろうと思っていない ・ 無理やり押しやられた
意図と読み取りにズレがあった

【OT 評価4】

(要求の意図を汲み取り、セラピストの意図を児に伝えている場面)

穴からおりにる時に、目が合い、手を出してきたため(図11)、対面で関わるチャンスだと考えた。介助する意図を伝えるためにセラピストは受け止めるかまえを見せるが(図12)、すぐには手伝わなかった。セラピストは活動目的を児と共有してから取り組みたいと考え、おりる場所をタッピングで伝えた(図13)。結果、児はセラピストの抱っここの構えに合わせてジャンプし、共有した場所に降りることが出来た(図14)。この場面では、児の意図とセラピストの読み取りに大きなズレはなく協同した活動が成功した。



図 11



図 12



図 13



図 14

表 5 : OT 評価 4 まとめ

セラピストの思考
セラピストの読み取りと関わり(降りる場面)
・目が合い、対面で関わるチャンス
・手伝う気持ちがあることを伝える
・震えた手と声で困っている気持ちに共感を示す
・活動目的を共有するためにマットを倒しタッピング
Aちゃんの反応
・セラピストの構えに合わせてジャンプ
・うまく受け止められた
協同した活動が成功

【OT 評価 1 ～ 4 から児の内的欲求を分析】

児が何に興味があるのか分かると、児の行動を予測しやすくなり、児の視界に入った関わりや相互的なやりとりの機会を作り出すことに有効だと考えて、児の内的欲求を頭の中でまとめた。

高い位置に登った時の達成感、ジャンプの浮遊感や、身体や足にドスンとした刺激を感じた時に笑顔が見られ、満足感を得ている様子に見えた。このことから“高い、不安定といった難しさを少し感じながらも、チャレンジすること”や

“ダイナミックに身体を動かすことで得られる前庭感覚や固有感覚に内的欲求があると考えた。

表 6：内的欲求のまとめ

セラピストの思考	
Aちゃんの内的欲求	
・高い位置に登る	→ 達成感
・ジャンプの浮遊感	→ 満足感
・身体や足にドスン	→ 笑顔
高い・不安定といった難しさを感じながらもチャレンジすること ダイナミックに身体を動かすことで得られる前庭感覚や固有感覚	
内的欲求	

【OT 評価 5】

(セラピストが上部のブランコに乗る様子を見て、児が登る方法を試行錯誤する場面)

児の試行錯誤は以下の順に行われた。

- ①自分で登ろうとする (図 15)
- ②母に抱っこを求める (図 16)
- ③以前経験した、トンネルを使用してブランコまで登る設定を再現しようとする (図 17)
- ④大人の手を引いて助けを求める (図 18)



参考

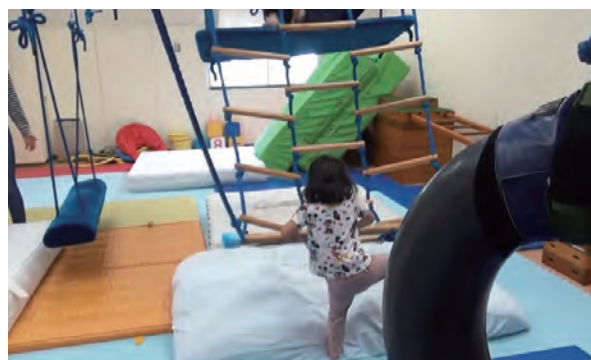


図 15



図 16



図 17



図 18

しかし、頼った相手の応答を待てず、どの方法もすぐに諦め、要求は叶えられなかった。

【評価のまとめ】

・強み

直接身体に触れた誘導に応じ、人の関わりに対する信頼感がある。また、具体物を見て行動し、やりたいことは一生懸命に取り組む。困った時は大人を頼り、抱っこの動きや手を引く動きで要求する力がある。

表7：強みのまとめ

評価のまとめ	
<u>Aちゃんの強み</u> ・身体に触れた誘導に応じる ・人の関わりに信頼 ・具体物を見て行動 ・一生懸命に取り組む ・困った時は人を頼り要求	   

・問題点

達成感や困り感を確認や共有する参照視が見られない。また、関わり手を確認するアイコンタクトが少なく、相手の意図に気付かない。

・主訴と問題点の関係

主訴の「商品を棚から落とす・店内を走り回るといった行動をやめられない」の原因は、母親が注意をしてもその意図に気付けないことが主問題であると仮説を立てた。

表8：主訴と問題点のまとめ

評価のまとめ	
<u>Aちゃんに見られにくい力と主訴との関係</u> ・達成感や困り感の時に参照視がない ・関わりの意図を確認するアイコンタクトがない ・誘導に応じるが相手の意図を汲み取れない	
お母さんの制止の意図が伝わらないコミュニケーション面の特性 商品を下落とす・店内を走り回る	

【治療目標】

目標は以下の3点とした。

- ①直接、介入された時、相手に意図があることに気づく力
 - ②関わりの意図を確認するためにアイコンタクトを取る力
 - ③達成感や困り感を周りの人と共有、確認するための参照視
- セラピー中に見たい児の姿は、ドキドキや

ワクワク、やったー！という情動と、満足感や達成感の笑顔が、母親やセラピストに向かうこと。大人が応じてくれると期待した児の関わりとした。

表9：治療目標のまとめ

セラピー目標と見たい姿
<u>セラピーの目標＝3つの力を引き出したい</u> ・直接介入で相手に意図があることに気づく ・関わりの意図を確認するアイコンタクト ・達成感や困り感の参照視 <u>セラピー中に見たいAちゃんの姿</u> ・ドキドキやワクワク、やったー！という情動 ・満足感や達成感の笑顔が、お母さんやセラピストに向かう ・大人が応じてくれると期待したAちゃんからの関わり

【治療的介入1】

(高い所に設定したスイングに乗り移り、不安を感じている場面(図19、20))

児を抱いて降ろすことも考えたが、セラピストが手を繋いだ時に少し安心した表情が確認できたので、どのように関われば、児が安心できるか考えて関わることにした(図21)。



図19



図20



図 21

姿勢が安定すると情緒も落ち着くと予測し、お尻と足にセラピストの手を添えて上からお尻方向に体重をかけた(図 22)。すると、児は少し落ち着きキョロキョロと周りを見て状況を確認する余裕が生まれた。下に降りるためにセラピストが身体誘導をすると、その意図に気づき座る姿勢を変えた(図 23)。最後に、セラピストの介助に合わせてとび降りることが出来た(図 24)。

児からは、不安、安心、期待と情動が変化する中で、セラピストの顔を見て気持ちの共有と関わりの意図に気づく様子が確認できた。



図 22



図 23



図 24

表 10：治療的介入 1 まとめ

セラピストの思考
セラピストの読み取りと関わり ・すぐに降ろすか？ どうすれば気持ちを落ち着けられるか？ ・お尻と足に体重をかけると、姿勢と情動が安定すると予測 ・ギュッとお尻方向に圧をかける ・Aちゃんが落ち着く ・降りるための身体誘導に気づく
Aちゃんの様子
・セラピストの顔を見て関わりを確認

【治療的介入 2】

(セラピストがオーシャンスイングに乗ると、児が追いかけてきた場面(図 25))。

児は登り切った喜びと達成感を共有するように母親の顔を見て笑顔になった(図 26)。



図 25



図 26

児の満足感に共感するようにセラピストが身体を密着させると、セラピストの身体に沿ってくる感じを受けた（図 27）。



図 27

セラピストはそのままの状態で「児が何かを発信してくれるかな」と期待して待つと、楽しさを確認するように母親の顔を参照視した（図 28）。



図 28

さらに、下に降りる気になった時にセラピストの顔を見て、手伝いを期待するアイコンタクトがあった（図 29）。



図 29

表 11：治療的介入 2 まとめ

セラピストの思考
関わりで意識していること 登り切った満足感を全身で表現しているAちゃんに ・身体を密着し“うれしいね！”と共感のメッセージを送る ・セラピストの身体に沿うように感じたAちゃんからの発信を待つ
↓ Aちゃんの反応 ・お母さんの顔を参照視 ・セラピストにアイコンタクトを送る

【治療的介入 3】

（関わりの意図を確認するようなアイコンタクトや、周りの人の反応を参照視している場面）

助けを求める児の手を、セラピストは持ち一瞬上方向にクッと腕を引っ張り、その後は力を緩めて児の反応を待った。児はセラピストの意図を確認するように顔を見る（図 30）。そして、撮影者やお母さんの顔を参照した後に（図 31）セラピストの手を引き、再度助けを求めた。



図 30



図 31

児は、最後に緑マットの頂上でセラピストの横に座り、セラピストの体に手をピタッとくっつけてから滑り降りた（図 32）。



図 32

表 12：治療的介入 3 まとめ

セラピストの思考
関わりで意識していること 助けを求めているAちゃん • すぐに手伝わす発信を期待して“間”を作る • Aちゃんが安心してマットの上を動けるように近くにいる
↓ Aちゃんの反応 • 腕を引かれたことに気づき顔を見る • 撮影者やお母さんを参照する • セラピストにヒタッとくっつく

【おわりに】

参照視や関わり手の意図を確認するアイコンタクトは、対人コミュニケーションにおいてとても重要と考えて OT を実施した。この力を引き出すためにセラピーでは、児側の意図を正しくキャッチすること、関わり手の意図を見に分かりやすく伝えること、うまく伝わらなかった時に別の方法を見に考えてもらうことを意識している。

今回、40 分のセラピー内で児の変化が確認できた。そして、主訴の“声をかけても振り返らない”“店内を走り回り、商品を棚から落とすので買い物が大変”の状況に変化があった。1 か月後に母親からは“声をかけると振り返る様になった”“買い物で手を繋いで移動できるようになった”“時々、商品を棚から落とすが、その時に母親の顔を見ながら反応を楽しむようになってしまった”と報告があった。新たな問題も出てきているが、その行動の質は大きく変わっている。

今回、自身の臨床推論についてまとめた。映像でセラピーを見直すと、効果的な関わりとそうではない場面の両方を確認できた。こどもがもつ力を引き出すセラピーが提供できるように、今後も日々精進したい。

こどもの支援には、発達支援・保護者支援・地域支援のいずれも大切である。特に発達支援の力を身に付けるためには、自身のセラピーを振り返り、言語化することの大切さを改めて実感した。

【付記】

本論文の要旨は、第 40 回日本感覚統合学会研究大会の「教育講座Ⅱ」にて発表したものに加筆修正を加えたものである。写真はご家族の同意を得ている。